

現代×文芸

名著

生命を感じる

『空にみずつみ』

佐伯一麦著

聡明で思索好きの青年は、地元仙台の名門高校を卒業すると、思うところあって進学せずに上京した。若くして父親になり、いくつかの職を経験した後、電気工として勤務。しかし、運命は過酷だった。自分も子供も心身の不調にみまわれる。離婚を経験し、自殺

未遂も起こした。

私小説作家として若き佐伯一麦が描いたのは壮絶な人生航路だった。しかし、そこに読めるのは降りかかる災厄をひたすら耐え忍ぶ姿ではない。むしろ逆だ。佐伯の主人公はつねに挑戦的である。逆境にあってもこだわりを捨てず、希望を



※2015年刊、現在は中公文庫(960円)。

書・神 莫山

空にみずつみ

多彩な作品を紹介してきた「現代×文芸 名著60」の本の一部。東京・神保町にある韓国の本のカフェ、チェッコリ(6月2日営業再開)で

災厄からのしぶとい再起

持ち、戦略を立て、ストイックに眼前の仕事に打ちこむ。

もちろん敗北感に打ちひしがれることもある。しかし、敗北からのしぶとい再起の道程にこそ、佐伯一麦の文学の魅力はある。『空にみずつみ』の連作はそんな回復の日々を、東日本大震災後の東北地方を舞台に、みずみずしい文章で描き出す。

中・高年の域に達した彼は、持病の喘息にとどまらず、電気工時代に大量に吸いこんだアスベストによる肺の不調をはじめ、数々の

失調に苦しめられている。もはや無理はきかない。それでも主人公は、新しい伴侶を得て穏やかな生活を送りつつある。

草花、動物、虫など自然の風景に注がれる観察眼は、伝統的な私小説の系譜にもつらなるが、佐伯の個性が本当に出るのは、太陽の側に虹が出る「環水平アーク」なる現象を話題にするあたりの、探究的な視線だろう。



本を読もう

本の値段は税抜きです

樹木、蛇、ミソ、勉強机と等身大の日常風景を支える事物に生命の力と詩情を見いだしつつ、さらに身を乗り出し、自ら手を動かしながら世界の懐に入ろうとする主人公には、たくましい古代人の風情さえ漂うのである。

(阿部公彦・英文学者)

女性の身体を

『東京島』(新潮) 島根大竹市の与田

志の坂念鶴子(55)は 津村記久